



Informatica® Application Integration
Summer 2019.July

OData コネクタガイド

Informatica Application Integration OData コネクタガイド
Summer 2019.July
2019 年 7 月

© 著作権 Informatica LLC 1993, 2020

発行日: 2020-01-29

目次

序文	4
第 1 章 : OData コネクタの概要	5
OData コネクタの概要.....	5
第 2 章 : OData 接続	6
基本的な接続プロパティ.....	6
OData 接続のプロパティ.....	7
第 3 章 : OData コネクタのプロセス	8
OData コネクタのプロセスの概要.....	8
索引	9

序文

『アプリケーションの統合向けの OData コネクタガイド』を読むと、組織の管理者やビジネスユーザーが、どのように OData コネクタを使用し、RESTful API 呼び出しを介して OData サービスに接続するかを理解できます。OData コネクタをアプリケーションの統合および OData 準拠、オンプレミス準拠、またはクラウドアプリケーション準拠のシステムと統合する方法を学ぶこともできます。

本書は、OData のオブジェクトとサービスの知識があること、およびアプリケーションの統合を使用して接続やプロセスを作成する方法を理解していることを前提としています。

第 1 章

OData コネクタの概要

- [OData コネクタの概要, 5 ページ](#)

OData コネクタの概要

Open Data Protocol (OData) は、RESTful API を構築および使用する際のベストプラクティスを定義する OASIS 標準です。

OData を使用すると、ビジネスロジックに専念し、RESTful API を構築できます。要求ヘッダー、応答ヘッダー、ステータスコード、HTTP メソッド、URL 規約、メディアタイプ、ペイロード形式、クエリオプションを定義する必要はありません。OData は、変更の追跡、機能や再利用可能プロシージャのアクションの定義、非同期要求またはバッチ要求の送信を補佐します。拡張機能を使用したり、RESTful API に関する独自のニーズを満たすには、OData を使用します。OData は、HTTP などの主要プロトコルや、よく知られている REST などの手法を基盤としています。

OData コネクタは、アプリケーションの統合を、SharePoint、データベース、SAP OData サービス、Team Foundation Services などのシステムと統合します。これらのシステムは、OData、オンプレミス、またはクラウドアプリケーションに準拠しています。アプリケーションの統合を使用すると、OData サービスで公開されたオブジェクトと相互運用できます。OData コネクタは、OData プロトコルでこれらのシステムと通信します。RESTful API 呼び出しを介して OData サービスに接続するには、OData コネクタを使用します。REST 呼び出しは、XML 形式または JSON 形式にできます。OData サービスがサポートする形式を選択します。

OData サービスのオブジェクトに接続するには、OData 接続を作成します。複数のアクティビティを実行するには、プロセス内の接続を使用します。OData 接続は、割り当てや作成などのステップタイプで指定できます。

第 2 章

OData 接続

この章では、以下の項目について説明します。

- [基本的な接続プロパティ, 6 ページ](#)
- [OData 接続のプロパティ, 7 ページ](#)

基本的な接続プロパティ

次の表に、[接続] ページの【プロパティ】タブで使用可能な基本プロパティを示します。

プロパティ	説明
名前	必須。Process Designer での識別に使用される、この接続の一意の名前。
場所	接続を配置するプロジェクトまたはフォルダの場所。接続の場所を選択するには、適切なプロジェクトまたはフォルダを参照するか、デフォルトの場所を使用します。
説明	オプション。接続の説明。
タイプ	必須。この接続に使用するコネクタまたはサービスコネクタ。設定するタイプを選択します。
実行日時	必須。この接続を実行する Cloud Server または Secure Agent。
接続テスト	直前の接続テストが表示されます（接続タイプでサポートされている場合）。
OData 対応	（接続タイプでサポートされている場合）。OData フィードを有効にし、許可されているユーザーとグループを指定するには、[はい] を選択します。
OData で許可されたロール	オプション。設計時に接続へのアクセス権を持つロール。カスタムロールまたはシステム定義ロールを入力できます。このフィールドには複数のロールを入力できます。

これらの基本プロパティに加え、コネクタによっては次を定義します。

- 接続タイプに適したプロパティ。
- **【イベントソース】** および **【イベントターゲット】**（当てはまる場合）。

【メタデータ】 には、接続のパブリッシュ時に生成されたプロセスオブジェクトが表示されます。

OData 接続のプロパティ

OData 接続をセットアップする際には、接続プロパティを設定する必要があります。

以下の表に、OData 接続プロパティを示します。

接続プロパティ	説明
実行日時	タスクを実行するランタイム環境の名前。
ユーザー名	OData サービスに接続するユーザー名。
パスワード	ユーザー名に関連付けられているパスワード。
サービスルート URI	<p>OData プロトコルを介して提供されるデータソースのルート URI。</p> <p>サービスルート URI によって特定されるリソースは、RFC 5023 で規定された AtomPub サービスドキュメントである必要があります。リソースに異なる形式が要求される場合、リソースは、AtomPub サービスドキュメントまたは AtomPub サービスドキュメントの代替表現の OData 規約に従う必要があります。</p> <p>ODate サービスのルートから返されるサービスドキュメントに基づいて、データサービスに対して使用できるすべてのリソースコレクションを表示できます。</p> <p>注: サービスルート URI 規約の詳細については、http://www.odata.org/documentation/odata-version-2-0/uri-conventions を参照してください。</p>
OData パラメータファイルのパス	<p>URL に付加するファイルの絶対パス。ファイルには、改行で区切ったキーと値のペアが格納されています。このファイルは、URL に必要な追加のパラメータ値を確認するために使用できます。</p> <p>注: ファイル内のキーと値のペアをエンコードするには、必ずパーセントエンコードを使用してください。</p>
データのシリアル化形式	<p>転送するデータの形式。以下のいずれかのオプションを選択することができます。</p> <ul style="list-style-type: none">- ATOM/XML- JSON <p>デフォルトは ATOM/XML です。</p>
オブジェクトフィルタ	OData サービス内でアクセスするオブジェクトを指定します。カンマ区切りのオブジェクト名のリストを指定できます。
プライマリキーのオーバーライド	プライマリキーとして使用する列名。複数の列名を区切るには、カンマを使用します。

第 3 章

OData コネクタのプロセス

- [OData コネクタのプロセスの概要, 8 ページ](#)

OData コネクタのプロセスの概要

アプリケーションの統合の Process Designer を使用すると、OData オブジェクトのデータを読み取り、作成、変更、または削除できます。

アプリケーションの統合のプロセスでは、OData サービスのオブジェクトに接続するための OData 接続を設定できます。複数のアクティビティを実行するには、プロセスの接続を使用します。OData 接続は、割り当てや作成などのステップタイプで指定できます。

例

組織の人事管理担当者が、新入社員の入社時に従業員データベースを更新するとします。この場合、OData サービスの Employees オブジェクトに対する OData 接続を作成します。続いて、ソースファイルオブジェクトから OData サービスの Employee オブジェクトに従業員の詳細情報を挿入するプロセスを設計し、実行します。

索引

O

OData

接続プロパティ [7](#)

OData コネクタ

プロセス概要 [8](#)

OData コネクタ (続く)

概要 [5](#)